

館林市埋蔵文化財調査報告書 第1集

大袋Ⅱ遺跡

(A 地点)

発掘調査概報

館林市教育委員会

序

館林市教育委員会

教育長 福田 郁司

館林市は群馬県の東端に位置する東毛の中核都市で、館林城の城下町として古くより栄え、市内には数多くの文化財が存在しています。

今回、赤羽の大袋地内に、土地区画整理事業が施行されるにあたり、区域内の遺跡の保存等について、館林市東部第三土地区画整理事業組合準備委員会等と協議した結果、記録保存の措置をとることとし、市教育委員会において発掘調査を行うこととなりました。

本年度は、遺跡の概要を明らかにするため確認調査を行うこととし、その結果において、本調査を行うことになりました。今回、確認調査を中心とする概報がまとまりましたので刊行いたします。

館林市は、昭和55年度『木と縁につつまれた、ゆとりとうるおいのあるまちづくり』をスローガンに新総合計画を打ち出し、新しい館林へと変容しようとしています。この様な時に、館林の歴史が数千年の古い時代にまでさかのぼれたことは、大きな喜びにたえません。

今回の調査及び報告は、不十分ではありますが、埋蔵文化財の理解のため、館林の文化財を長く後世に伝える資料として、地域の文化向上に役立てば幸いです。

最後に、この調査にあたり、御協力くださいました関係者の方々に、心から感謝申し上げる次第です。

昭和56年3月31日

例　　言

1. 本書は、館林市大字羽附字大袋地内に所在する大袋Ⅱ遺跡A地点の発掘調査概報である。
2. 本発掘調査は、館林市東部第三土地区画整理事業に伴う緊急発掘調査である。
3. 本発掘調査の主体は、館林市教育委員会であり、その組織は次の通りである。

教育長 福田郁司

教育次長 河内隼一

事務局（館林市教育委員会 文化振興課文化財保護係）

課長 錦田正弘

係長 篠原隆夫

主任 三田正信

主事 篠原百合子

調査員 岡屋英治

調査補助員 新藤紀子

調査作業員（発掘、整理） 児玉隆司・越沢かつ・飯塚てう・泉田登美子・島田とも子
中里昇・川口和子・齊藤景子・武藤けい子・青山朗・福島吉晴

4. 調査に伴う諸経費は、国（2,000,000円）、県（600,000円）補助による、総額5,460,000円である。
5. 確認調査は55年11月～56年2月まで行い本調査は56年度とした。
6. 本概報は確認調査の資料を中心にまとめたもので、遺物の大半は未整理の段階であり、本報告は整理終了後に行う予定である。
7. 写真撮影、図面作成、トレース、編集は、三田、岡屋、新藤が担当した。
8. 調査から、概報刊行にあたり下記の方々、諸機関に御指導、御教示、御協力いただいた。
記して感謝いたします。（敬称略　順不同）
新井房夫、沢口宏、能登健、洞口正史、伊藤晋介、大塚昌彦、谷津義男、岡田喜代次、篠原
源次郎、鈴木清一、半田誓一郎、篠原久、篠原久七、岡田義男、篠原カウ、他
県教育委員会文化財保護課、市都市計画課、市区画整理課、東部第三土地区画整理組合準備
委員会。

目 次

序

例言

目次	1
----	---

挿図目次	1
------	---

I 遺跡の環境	3
---------	---

1. 地理的環境	3
----------	---

2. 歴史的環境	3
----------	---

II 調査の経過	6
----------	---

1. 調査に至る経過	6
------------	---

2. 調査の方法と概要	6
-------------	---

III 土層	10
--------	----

IV 遺跡の概要	11
----------	----

1. 遺構について	11
-----------	----

2. 遺物について	11
-----------	----

V 調査のまとめ	17
----------	----

挿 図 目 次

第1図 鹤林市周辺の地形図(1:100,000)	2
--------------------------	---

第2図 周辺の遺跡	4
-----------	---

第3図 大袋II遺跡現況図	7
---------------	---

第4図 大袋II遺跡A地点調査区図	8
-------------------	---

第5図 土層柱状図	10
-----------	----

第6図 D-6トレンチ遺物分布図	12
------------------	----

第7図 C-5トレンチ1号、2号土坑実測図	13
-----------------------	----

第8図 土器拓影(1/3)	15
---------------	----

第9図 石器実測図(1/2)	16
----------------	----

写 真	19
-----	----

第1図 前林市周辺の地形図(1:100,000)



I. 遺跡の環境

1. 地理的環境

本遺跡は、東武伊勢崎線館林駅の東方約2kmの地点に位置している。地籍は、群馬県館林市大字羽附字大袋3080-1、3080-2、3080-3、3082-1、3082-2、3082-3、3083-2、3084、3085、3086-8、2549-3、2549-27、同松原二丁目262-4、263-3、264-1、264-2、264-4、264-5、277-1、277-2番である。

館林市は関東平野のほぼ中央部に位置する市で北を渡良瀬川、南を利根川にはさまれたところにある。本市付近は、洪積世から現在まで造盆地運動がさかんであったところで、両河川は網目状の水路を持っていたと考えられる。洪積台地は、これらの水路のはこんだ堆積物の上にロームが積って作られたと考えられ、標高はかなり低い。

現在洪積台地を開拓して、矢場川、谷田川両水系があり、城沼、近藤沼、多々良沼をはじめとする数多くの沼、谷地は両水系の谷頭に形成された小沼である。

本遺跡をはじめとする大半の遺跡は、このようにして作られた洪積台地上に存在する。

縄文海進時には古東京湾が、渡良瀬遊水地付近にまで入り込んでいたことは、栃木県藤岡市の篠山貝塚、群馬県板倉町の海老瀬貝塚等の存在から証明できる。

本市は、大きく二つの台地に分けることが可能である。市のほぼ中央を鶴生田川が流れ、こ註1ことを開析谷として館林の台地を北部台地と南部台地に分けることができる。

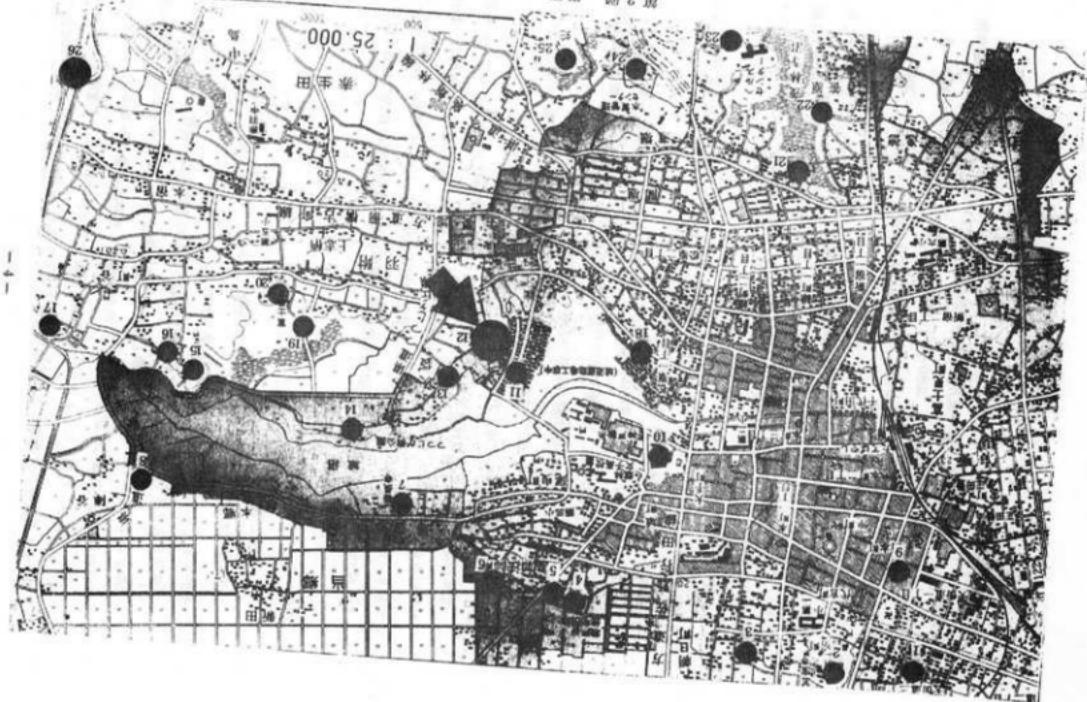
北部台地は矢場川水系の開析をうけている台地で、現在の市街地となっているため、確認されている遺跡は少ない。南部台地は谷田川水系の開析をうけている台地で、比較的よく発達しており、現在でも農地が多い事などから、舌状台地には必ずといってよい程、遺跡を発見することができる。大袋II遺跡は南部台地の東端部、城沼に延びる樹枝状の台地の北縁に位置している。

2. 歴史的環境

縄文時代の遺跡は前述した台地上に広く分布している。分布の状態をみると、それぞれに地形的なまとまりと時間的な差が顕著にあらわれる。

城沼を取り巻く台地の縁辺には縄文時代早期～後期の遺跡が広く散在している。特に早期の土器を出土する三軒屋遺跡①、大袋I遺跡③、花山東遺跡④、屋敷添遺跡⑤は本遺跡同様、南部台地東端部の北縁に位置している。市内全域をみても早期の遺跡が集中しているのはこの部分だけである。前期になると城沼の東端部に南面する下志柄遺跡⑥、本遺跡と城沼をはさんで対する善長寺付近遺跡⑦など城沼周辺に広がりを見せ、以後普遍的に集落が営まれていたと

第2圖 地政の現跡



思われる。

南部台地の南辺には縄文時代前期～後期の遺跡が多くみられる。南部台地の南面は利根川などの河川の侵食により標高20mの線が舌状に入りこんでいる。台地下においては沖積低地の旧流路を示す茂林寺沼、蛇沼などの湖沼が形成されている。遺跡は舌状台地の縁辺に集中し、腰巻遺跡²¹、笹原遺跡²²、下堀工道溝遺跡²³、大原道東遺跡²⁴、間堀遺跡²⁵などがその例である。

北部台地の奥に入り込んだ市街地では縄文時代中期～後期の遺跡が散在する。市街地ということもあり、大街道遺跡¹¹、朝日町遺跡³、加法師遺跡⁴、外加法師遺跡⁶がわずかに確認されているものの、破壊された遺跡もある。

市内で弥生時代の遺跡が発見されたのは道溝遺跡²⁶の1例しかないが、低地に面した数高地に集落が営まれていた可能性は大きいと思われる。しかし、河川の氾濫原にあたる低地では流水していることも考えられる。道溝遺跡は昭和45年、東北自動車道建設に伴う緊急発掘調査が、県教育委員会によって行われており、縄文時代～平安時代の複合遺跡であることが判明しているが、弥生時代の遺構としては後期の住居址が一軒であった。さらにここで注目されるのは方形周溝墓の存在である。近年群馬県内においても多数発見されている。

古墳の数を県内みると台帳登載件数は1582件であるが、市内においてはわずか6件しか残されていない。本遺跡周辺の古墳は、町谷古墳²⁷、富士山古墳²⁸、山王山古墳²⁹、愛宕神社古墳があるが、いずれも保存状態は良くない。

古墳時代の住居址は道溝遺跡において調査されているが、この他にこの時期の土器を出土する遺跡には当郷遺跡³⁰、三軒屋遺跡がある。奈良、平安時代の土器を出土する遺跡の調査例は道溝遺跡のみであるが、善長寺付近遺跡や本遺跡周辺でも平安時代前期の土器がかなり表面採集でき、今後この時期の遺跡はますます増えるものと思われる。

鎌倉時代以降になると、注目される遺跡では、城館址がある。白旗城址³¹、と大袋城址³²はいずれも室町時代のものであるが、残存しているのは土塁と城濠跡である。特に大袋城址は館林城の前身と考えられ、城址の変遷を知る上で重要な位置にある。

館林城は文献によると天文元年(1532)に築城されたと言われている。館林城は周囲が平地でその中央の丘上にある平城である。現在その跡を残すものはわずかに土塁と城濠跡であるが、三の丸土橋門周辺の土塁³³は平地築城の代表的なものである。他に前期館林城の土塁は加法師町³⁴に、後期館林城總曲輪の土塁、城濠跡は台宿町³⁵に残存している。いずれもその当時の館林城の規模を知る上では重要な遺跡である。

以上が大袋II遺跡の周辺にみられる遺跡であるが、これらは『群馬県遺跡台帳』に登載されているものである。この中にはすでに調査されずに破壊された遺跡もいくつかあり、現実に破壊寸前に残している遺跡も多い。なおいっそうの文化財保護対策を実施したいと思う。

II. 調査の経過

1. 調査に至る経過

大袋II遺跡は、館林市東部第三土地区画整理事業区域内にあるため、館林市教育委員会は、遺跡の保存等について県教育委員会文化財保護課、市都市計画課、市区画整理課、館林市東部第三土地区画整理事業組合準備委員会等、関係者と協議を行ってきた。

同事業区域は、つつじ町住宅団地、県立つつじヶ岡公園に隣接し、都市計画道路の整備に伴い、住宅地としての利用度が高い地域であり、又近年の個人住宅の建設が目立ち、急速な市街化が予想される地域である。同事業はこれらをふまえた健全な市街地を造成することを目的とした秩序ある開発行為であると考えられるため、市教育委員会では事前に記録保存の処置をとることとした。以下その経過を簡単に記す。

昭和55年3月 館林市東部第三土地区画整理事業計画綱覧がはじまる。埋蔵文化財包蔵地についての協議開始。

昭和55年4月 計画概要の説明をうけ、上記の理由をふまえて記録保存の方向で検討する。

昭和55年5月 県教育委員会文化財保護課の指導により現地踏査を行う。遺物散布地が、A、B、Cの三地点に見られることを確認する。その遺物からA、B地点が縄文時代前期～中期のC地点が、奈良～平安時代の集落跡であると予想された。準備委員会等と調査区域について協議。

昭和55年6月 調査方法等を準備委員会と協議。工事計画書を検討する。調査方法については $20 \times 1\text{ m}$ のトレンチ方式によって確認調査を行い、遺構、遺物の確認された場合は本調査を行うこととした。

昭和55年9月 大袋II遺跡、A地点より11月を目途として調査に入る旨、地権者と協議する。

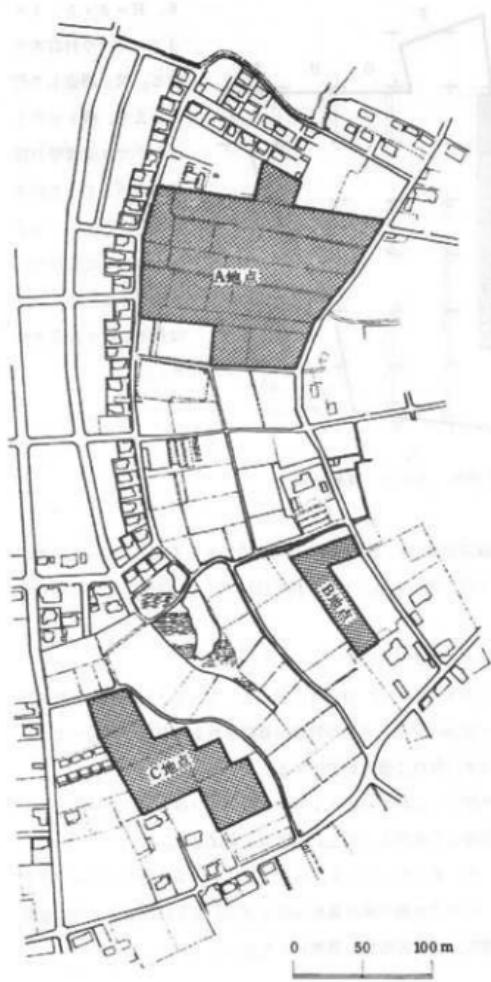
昭和55年10月 大袋II遺跡調査について地権者を集め現地説明会実施。同説明会において、地権者より、耕作中の作物について配慮して欲しいとの意見があり、収穫終了部分より予備調査を開始することで合意。

昭和55年11月 A地点より調査開始

2. 調査の方法と概要

前述のごとく昭和55年5月の現地踏査の結果、館林市東部第三土地区画整理事業区域内に、3地点の遺物散布地が確認された。それぞれを大袋II遺跡A、B、C地点とした。

A地点は、大袋II遺跡として県台帳No1103、市台帳No12に登載されている。表探資料として



第3図 大袋II遺跡現況図

呼ぶものとした。(例えばA-5グリットにあるトレンチについては、A-5トレンチと呼ぶ)

耕作物(上作)の関係上調査することのできたトレンチは、C-3・4・5・6・7、D-3・4・5・6・7、E-3・4・5・6・7・8、F-5・6・7・8、G-3・5・7・

は、縄文時代前期黒浜式の土器片が多く見られた。

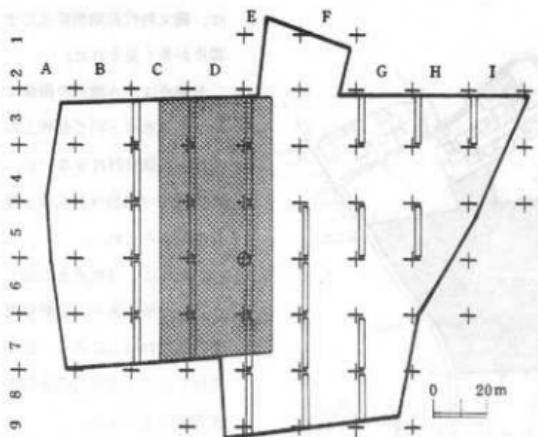
B地点は、A地点の南側にあり、A地点と同じ台地上にある。表探資料は少ないが、縄文時代中期加曾利式の土器片が数点みられた。

C地点は、B地点と谷地をへだてた所にあり、三軒屋遺跡と同じ台地上にある。表探資料では、平安時代国分式の土器片が見られた。

調査の方法は、A・B・C地点ともそれぞれの地形に即して1辺20mのグリットを設定し、その西壁を幅1mで南北に試掘するトレンチ方式をとり、遺構・遺物等が確認された場合には本調査を行うこととした。又、本年度の調査はA地点を対象とし、A地点調査終了後、順次B地点、C地点へとうつることとした。

A地点では、上記の方法で西東に9列(A~I)、北南に9列(1~9)の計54のグリットを設定することができた。

トレンチ名については、グリットのナンバーと同じ名称で



第4図 大袋II遺跡 A地点 調査区図

調査日誌（確認調査分）

昭和55年10月29日～31日 地権者合意のもとにグリット設定、杭打ちに入る。グリットは西北角の杭を基本に西から東へA～I列、北から南へ1～9列の計54グリット設定。これにあわせトレンチ（調査溝）設定。

11月1日 作業員打合せ クワ入れ式を行う。

11月4日～5日 調査開始。C-5、6、7、D-5、E-5、F-5トレンチと上作終了部分より掘り始める。表土(15～20cm)即ローム層の状態が確認される。D-5、E-5トレンチで、ローム層土面から、かなりの数の土器片が出土する。

11月6日 D-6、7トレンチ掘り。土器片の出土(ローム層より)が多い。D-6トレンチで石匙、D-7トレンチで一括個体(黒浜式)出土。作業員を喜ばせる。

11月7日～12日 E-6、7、8、F-6、7、8、G-7、8トレンチ掘り。E-7、F-8トレンチで遺物がやや多い。イモ穴や倒木等の落ち込みは見つかるものの遺構(住居址等)は確認できない。県文化財保護課、能登氏来訪、御教示いただく。

11月13日 雨の為、作業中止。

11月14日 F-8トレンチで確認された遺構調査。火山灰を覆土に含む土壌であることが判明。火山灰鑑定を県文化財保護課に依頼する。

11月17～20日 幅1mのトレンチでは遺構確認に不明な点が多いことより、各トレンチ2mに拡張。火山灰を覆土に混入する土壌をいくつか確認はじめる。D-5、6、7、F-5、

8、H-3・5、I-3トレンチの計27本である。又、調査して行くうえで、幅1mのトレンチでは遺構等の確認に不明なところが多いことから各トレンチとも幅2mに広げた。
調査の概要については調査日誌を参照されたい。

6. 7トレンチでは遺物が多い。

11月21日～25日 雨の為、作業できず。

11月26日～30日 各トレンチ拡張。黒色土(Ⅱ層)の落ち込み等を確認する。

12月1日～7日 露がおりはじめる。各トレンチ遺構確認。遺物上げ、掘り下げをくりかえす。ローム層中より土器片の出土がみられる。火山灰鑑定結果、浅間C凝灰岩と判明。

12月8日 G-5、H-5トレンチ排土。表土下にⅡ層が確認できる。

12月10日～14日 G-3、H-3、I-3トレンチ調査。やや遺物多い。

12月15日～26日 各トレンチ遺構確認の為、掘り下げ、遺物上げをくりかえす。暗褐色土(Ⅱ層)の落ち込みを掘ってみると、遺構とはならず。遺物分布図(各トレンチ)作成。

12月27日～昭和56年1月5日 年末年始休み。

1月6日～14日 遺構の確認ができないため、各トレンチに幅50cmのサブトレンチを掘る。遺物分布図作成、遺物上げに専念する。

1月10日、E-7サブトレンチ内で焼土確認。黒浜式土器を伴う。周辺の精査の結果住居址と思われる。覆土は、ローム層(Ⅲ層、N層)に酷似している。

1月15日～2月5日 C-3、4、D-3、4、E-3、4トレンチ調査。D-3、4、E-3、4トレンチでは遺物多い。

2月6日～10日 C-3、4、D-3、4、E-3、4トレンチ遺構確認、遺物上げ。

2月10日～19日 遺物の分布状態や、確認された遺構のあり方などから、本調査部分の検討を行う。その間も、遺構確認の為、各トレンチ精査をくりかえすが、明確ではない。

本調査部分をC-3、4、5、6、7グリットの東半分、D-3、4、5、6、7グリットE-3、4、5、6、7グリットの西半分の40×90mと決定。地権者に通知。

2月20日 ブルドーザー投入。確認調査トレンチ埋めもどし。本調査部分の表土剥ぎ。

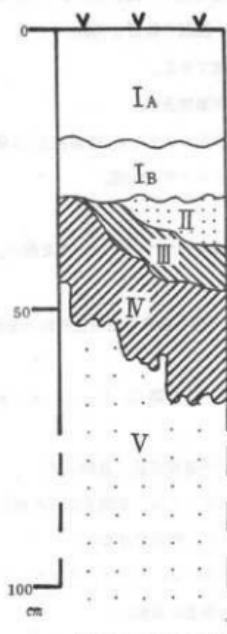
以上を持って確認調査を終了し、ひきつづき本調査へとうつることとなった。

III. 土層

館林の洪積台地は、前述のように旧河川の運んだ堆積物（砂、シルト）の上にロームが積って作られたと言われる。本遺跡も表土下にロームが存在することから洪積台地上に存在する。

第5図は比較的残りの良いI-3トレーナーの土層断面を参考に本遺跡の土層を模式的に示したものである。深掘りをしなかったのでローム層中の暗色帯等は確認できなかったが、F-8トレーナーで倒木柵を調査した際、表土下約15mで暗色帯と思われる層にあたった。

本遺跡は、耕地整理、陸田施設（暗渠）のため土が動かされていることが観察できる。西から東への移動がみられ、B、C、Dのトレーナーでは耕作土（15~20cm）即ロームとなる。Bラインでは漸位層さえも確認できない。G、H、Iのトレーナーでは耕作土下に暗褐色土層が10~15cm程確認できる。次に土層の説明を加えることとする。なお本遺跡の土層は、今後の本報告に際して、検討を加える必要もあり、今回の層区分も一部改正することもある。



第5図 土層柱状図

第IA層 褐色土 陸田面で粘性、しまりなく粒子が荒い。さらさらして1mm程の粗石を含む。

第IB層 褐色土、陸田の床面で、非常にしまっている。質的にはIA層と変わらない。

第II層 暗褐色土、粘性、しまりあり、黒朱をおび、緻密で下方に行くと黄味をおびる。

第III層 暗褐色土、いわゆるローム漸位層である。

第IV層 黄褐色土、ロームのソフト部分である。

第V層 黄褐色土、ロームのハード部分である。

以上本遺跡の土層について述べて来たが、繩文時代、前期黒浜式を中心とする遺物は、III層からV層にかけて多く出土している。又、この土層中にはないが、浅間C粗石が土壠の覆土から検出されている。層中のどの位置に入るかは今後、検討を要す。館林市において本格的な発掘調査は、今回が初めてであり、直接、比較対照できる資料は少なく、今後の発掘、整理、検討の中で、本遺跡出土の遺物と出土層との確認を近隣地域と対比しながら考えて行きたいと思う。

IV. 遺跡の概要

1. 遺構について（第6、7図）

確認調査において確認された遺構は、住居址1軒（縄文時代前期、黒浜式土器を伴う）、土塙10基、遺物集中部分6箇所と少ない。

住居址については、その覆土がロームに酷似しているためサブトレーンチにおいて、伊址を確認するまで気づかなかった状態である。このように考えると、遺物集中部分は、住居址としての可能性が大きく、本調査区域は、これを考慮して決定した。

遺物集中はいずれも、前期黒浜式土器を中心とするもので、D-3、D-6、D-7、E-4、E-6、E-7トレーンチで見られ、これは、台地の縁辺を中心として馬蹄形状に存在している事がわかる。サブトレーンチは入れなかったものの遺物の出土量の多さや、その分布状況から住居址と判断して良いと考えられる。

土塙は、比較的容易に確認することができた。分布状態は一定でなく、台地の奥から縁辺部まで、2～3基かたよっていたり、単独で存在したりである。これらの土塙の特徴は、そのいずれもが、覆土に浅間C軽石を含むことである。調査を行ったC-5トレーンチ1号、2号土塙について記せば、平面形130×110cmの小判形を呈し、深さ60cm、覆土は、自然流入による埋没ではなく、軽石を含む暗褐色土で埋めもどされた状態を呈する。又、塙底近くでは、ローム自体をその覆土としている。

本調査は、確認された遺構の集中する地域を対象に決定し、前期集落の形態を検討するとともに、土塙の在り方、その性格等について検討して行きたいと思う。

2. 遺物について（第8、9図）

土器（第8図）

次に確認調査で出土した土器について、簡単に分類を行い説明を加えることとする。

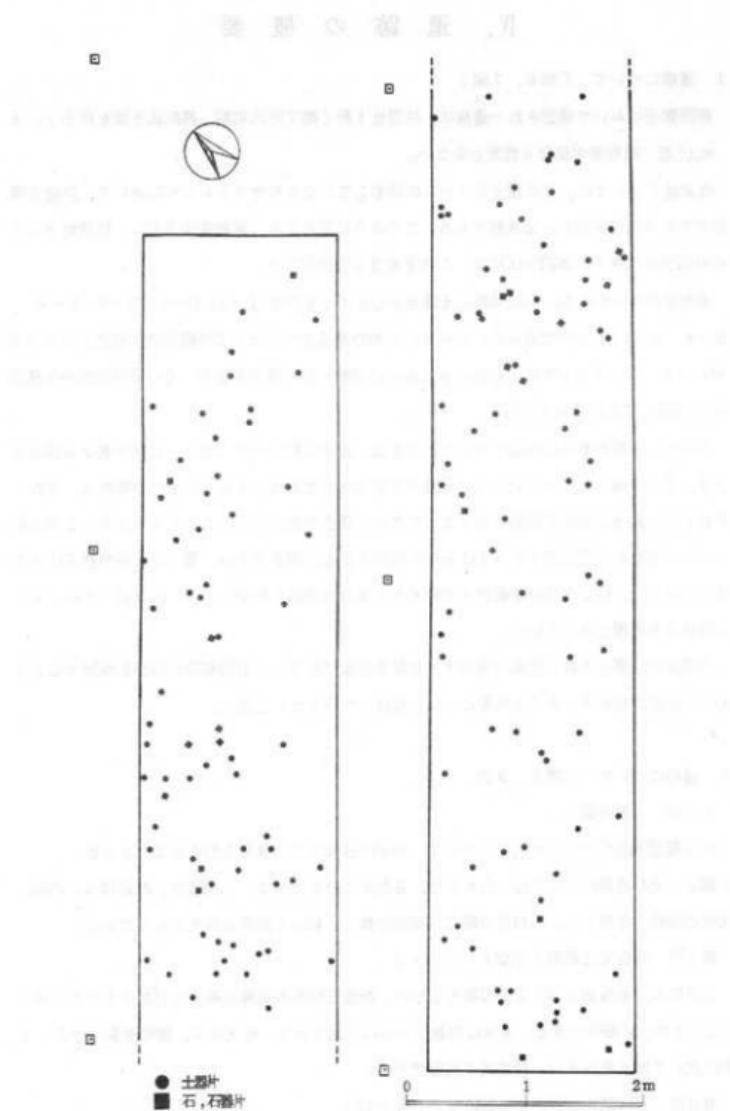
分類は、その時期によって行ったもので、各型式に細分できる。又図版中、断面図は、時間、図版の関係上省略した。本報告の際に、再度分類し、細かく説明を加えるものである。

第I群 条痕文土器群（早期末）（1～7）

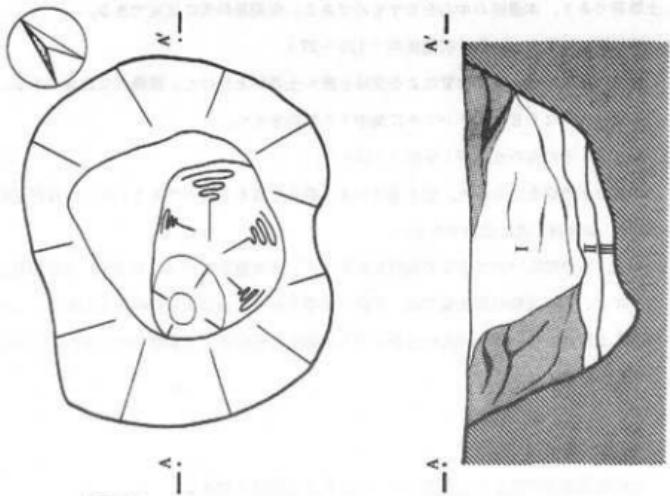
この群は、条痕文を有する土器群を分けた。断面三角形の細隆起線文を付加するものとそうでないものとに細分できる。条痕は表裏どちらにも施される。胎土には、繊維を混入する。II群に次いで出土量が多い。野島式に比定できる。

第II群 羽状縄文土器群（前期前半）（8～19）

ここでは胎土に繊維を多量に混入し縄文を文様とする土器群を分けた。縄文のみ、羽状縄文

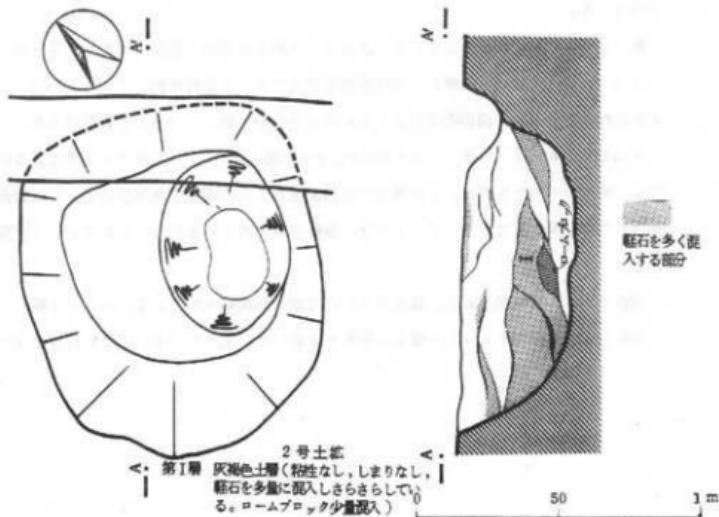


第6図 D-6トレンチ遺物分布図



1号土壠

- 第Ⅰ層 灰褐色土 (粘性なし、しまりなし、軽石を多量に含む。さらさらしている。ロームブロック少量混入。)
 第Ⅱ層 明褐色土 (粘性あり、しまりあり、ロームで層をなす。軽石は含まれない。)
 第Ⅲ層 暗褐色土 (粘性はあるがしまりがない。ロームの小ブロック状で褐色土粒子を含む。)



第7図 C-5 トレンチ1号、2号土壠、実測図

のもの、ループ文のもの沈線が施されるものなどに分類できる。確認調査で最も出土量の多い土器群であり、本遺跡の中心をなすものである。前期黒浜式に比定できる。

第Ⅲ群 竹管文土器群（前期後半）（20～27）

胎土に纖維を含まず、竹管による文様を施す土器群を分けた。諸磯式に比定できる。

出土量は多くなくE-6トレンチに集中する傾向をもつ。

第Ⅳ群 その他の土器群（中期）（28～30）

中期の土器群をまとめた。出土量は少なく数片を数えるのみである。28、29は阿玉台式、30は、加曾利E式に比定できる。

以上、各分類について若干の説明を加えたが、まだ整理を行っておらず、かい間見た程度にすぎない。ただ遺物の出土量では、Ⅱ群の土器群が多く全出土数の80%をしめる。この他に、黒浜式土器の一括個体、同式の土器を伴う住居址の確認等、本遺跡の中心は、この時期のものと判断することができる。

石 器（第9図）

次に確認調査で出土した石器のいくつかを上げ説明を加える。

石斧（1～3） 1、2は打製石斧でいずれも片面調整である。裏面には自然面をのこす。1はチャート製、2は砂岩製、3は磨製石斧で両面ともきれいに磨かれ刃部ははるどく作り出されている。

磨石（4） 裏面は剥落している。表面はよく磨かれ擦痕が側面には打痕がみとめられる。

スクレバー（5） 円錐の一部に調整を加えてエッジを作り出している。スクレバーと考えられるが一部に打面調整痕のようなものが見とめられ、コアとも判断できる。

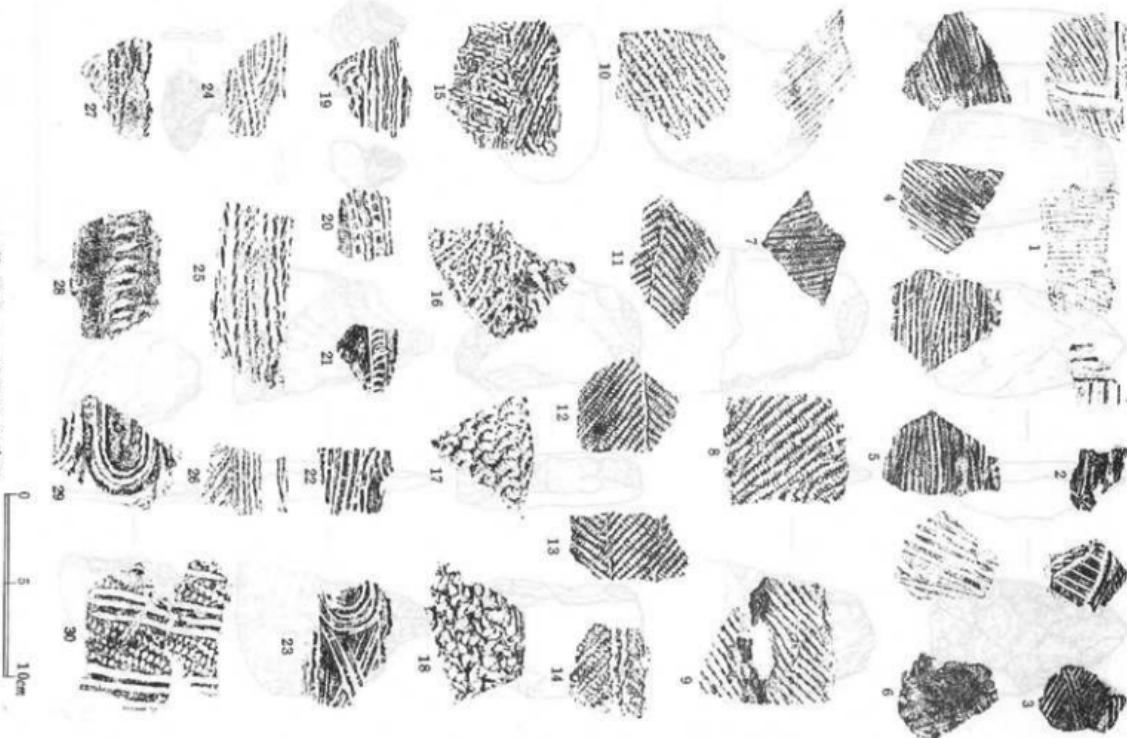
フレイク（6、7） 出土した石器の内、その大部分が、チャートのフレイクであるが、ここでは、大型のものを上げた。6は裏面に自然面をのこし断面は三角形を呈す。7は表面に自然面をのこす縦長剝片でブランディング状の調整がみとめられるが、フレイクとして分類していた。

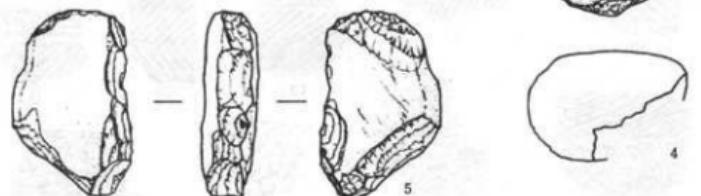
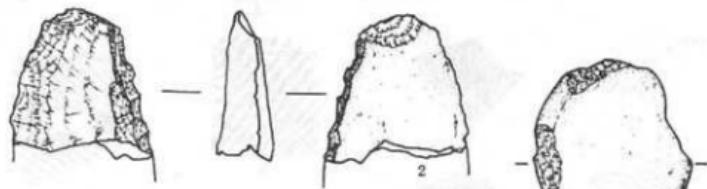
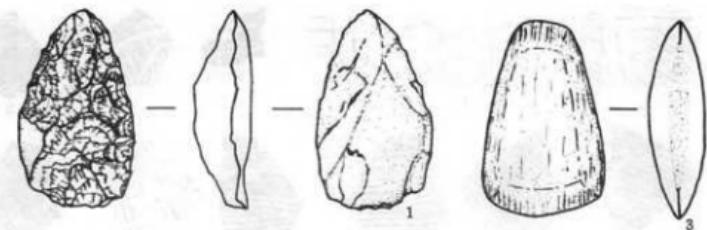
石鎌（8） 未製品である。縦長の剝片の先端部が調整されている。チャート製。

石匙（9） 赤いチャートの横長の剝片をきれいに仕上げている。1点のみの出土である。

第8図 土器拓影(1/3)

-15-





0 5 10cm

第9図 石器実測図 ($\frac{1}{2}$)

V. 調査のまとめ

確認調査において確認されたことをまとめ本調査、本報告にむけての指針としたい。

今回の確認調査で確認された遺構は、住居址1軒（縄文時代、前期黒浜式土器を伴う炉址確認）、土塹（浅間C鞋石を覆土に混入する）10基、遺物集中部分6箇所であった。遺物の時期は、縄文時代、前期黒浜式を中心に、野島式、諦巣式、阿玉台式、加曾利E式と早期末から、中期まで広い範囲に及ぶ。

確認された遺構は少なかったが、住居址の覆土が、ローム層（Ⅲ・Ⅳ層）に酷似していることや、遺物の分布状態に集中が見られることなどから、まだ数基の住居址や、遺構が存在することが考えられる。遺物の分布は、D-3・4・5・6・7、E-3・4・5・6・7トレンチにやや集中している。特にD-7トレンチでは、黒浜式土器の一括個体が、E-7トレンチでは同式の土器を伴う炉址が確認されている。これらのグリットは、斜面を昇りきって平坦面に移行した部分であり、前期を中心とする集落は、台地の縁辺部に馬蹄形状に存在することが考えられる。

以上のこと考慮した結果、本調査は、C-3・4・5・6・7グリットの東側半分、D-3・4・5・6・7グリット、E-3・4・5・6・7グリットの西側半分の東西40m、南北約90m（面積約3,600m²）を対象とすることにした。

遺跡の詳しい内容や考察等に関しては、本調査終了後の本報告時にゆずることにしたい。

今回の調査は、前述のごとく、本市としては、初めての組織的な発掘調査であるため不備な点が多いものとなってしまったが、今後、A地点の本調査、B、C地点の調査、又、市内に所在する遺跡の調査・研究にあたっては、可能な限り十分な調査・研究を行い、本市の原始・古代史を序々に解明するとともに、埋蔵文化財への理解、文化財保護の思想を探めて行きたいと思う。

参考文献及び註

註1 ここでは仮りに北部台地と南部台地とに分けた。正式名称ではない。

註2 繩文時代の包蔵地はその大半が、標高20mのコンターと一致する。

註3 三軒屋遺跡(No.1125)等をあげることができる。

註4 群馬大学、新井房夫氏鑑定による。

参考文献

「館林市誌」歴史編

「館林市誌」自然編

「館林叢書」1・2・3・4・6巻 館林市立図書館

「群馬県遺跡台帳」I 東毛編 館林市 群馬県教育委員会

「群馬のおいたちをたずねて」上・下、木崎喜雄、野村哲、中島啓治著、上毛新聞社

「遺跡は語る」—よみがえる群馬—毎日新聞社、前橋新聞社

写 真

新文化运动时期的一张明信片

新文化运动时期的一张明信片



1. 大袋II遺跡 A地点遠景



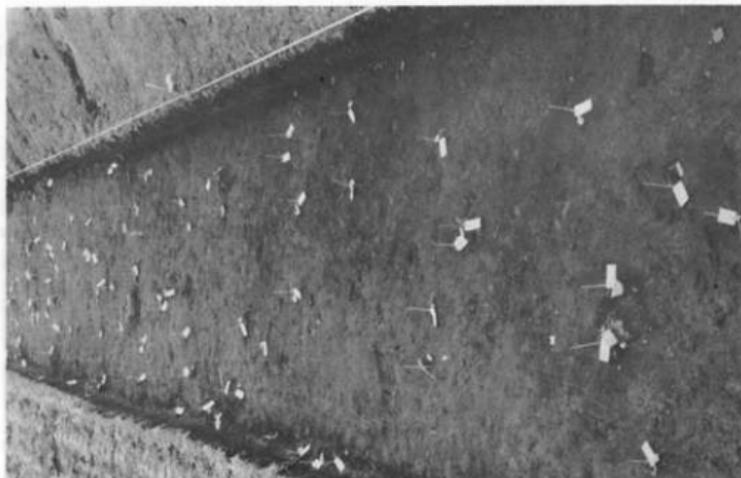
2. 大袋II遺跡 A地点近景



3. 発掘作業風景



4. 同上



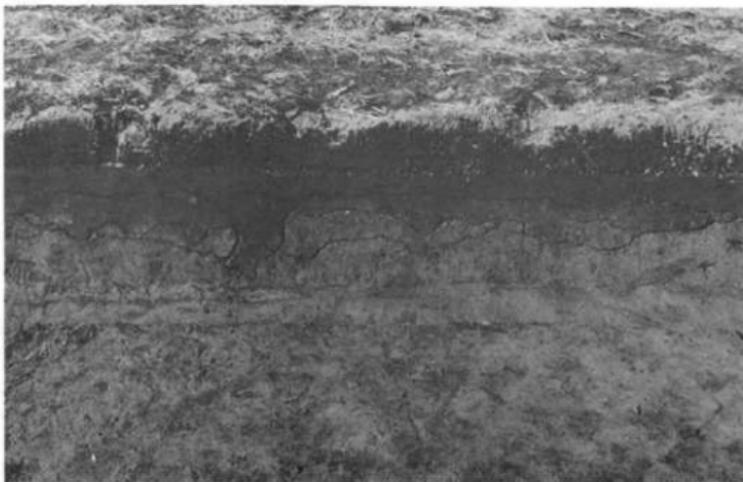
5. D-6 トレンチ遺物出土状態 (遺物集中部分) 1966年1月2日



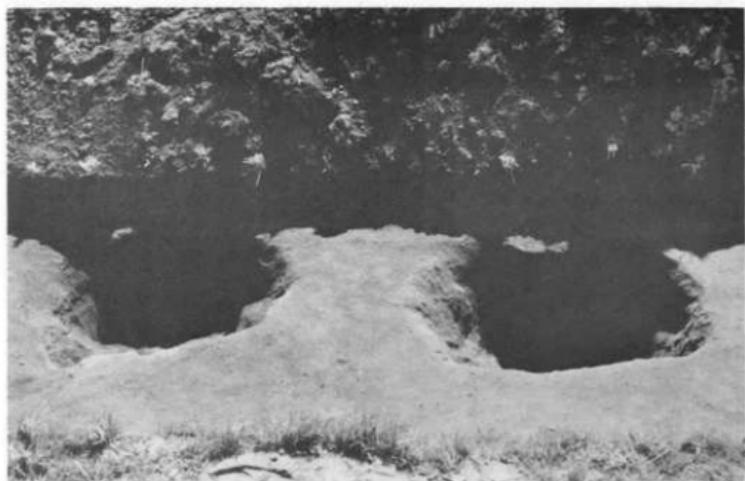
6. E-7 トレンチ遺物出土状態 (住居址、炉跡部分)



7. E-6 トレンチ遺物出土状態（遺物集中部分）



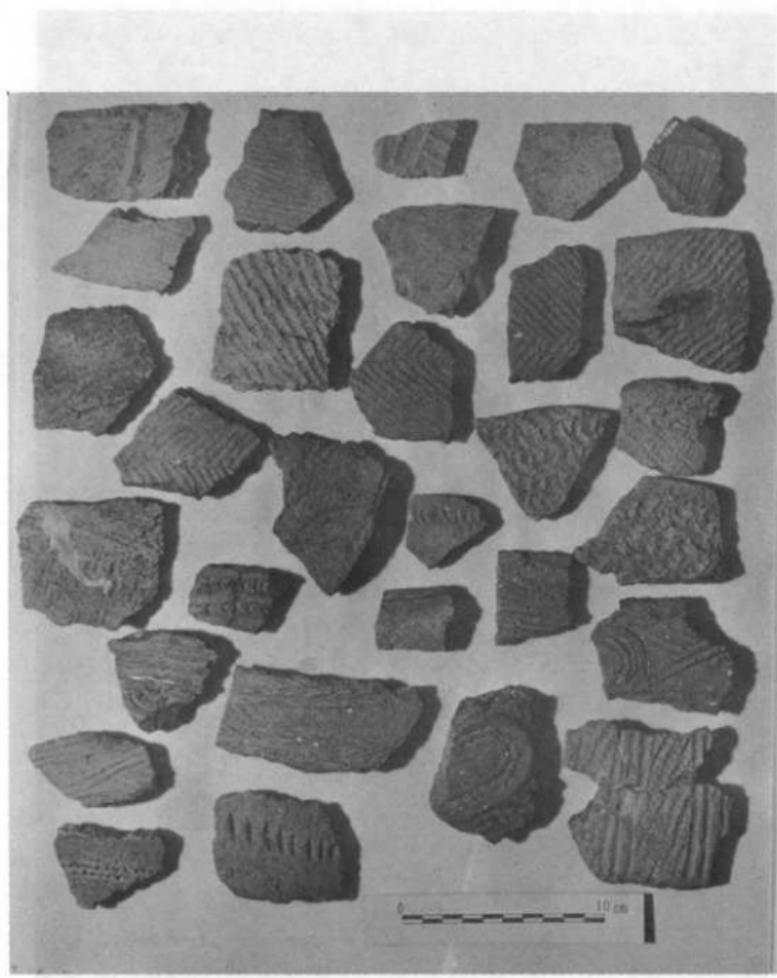
8. I-3 トレンチ西壁土層断面（左側）出土状態（発見位置）



9. C-5 トレンチ 1号、2号土塹(平面)

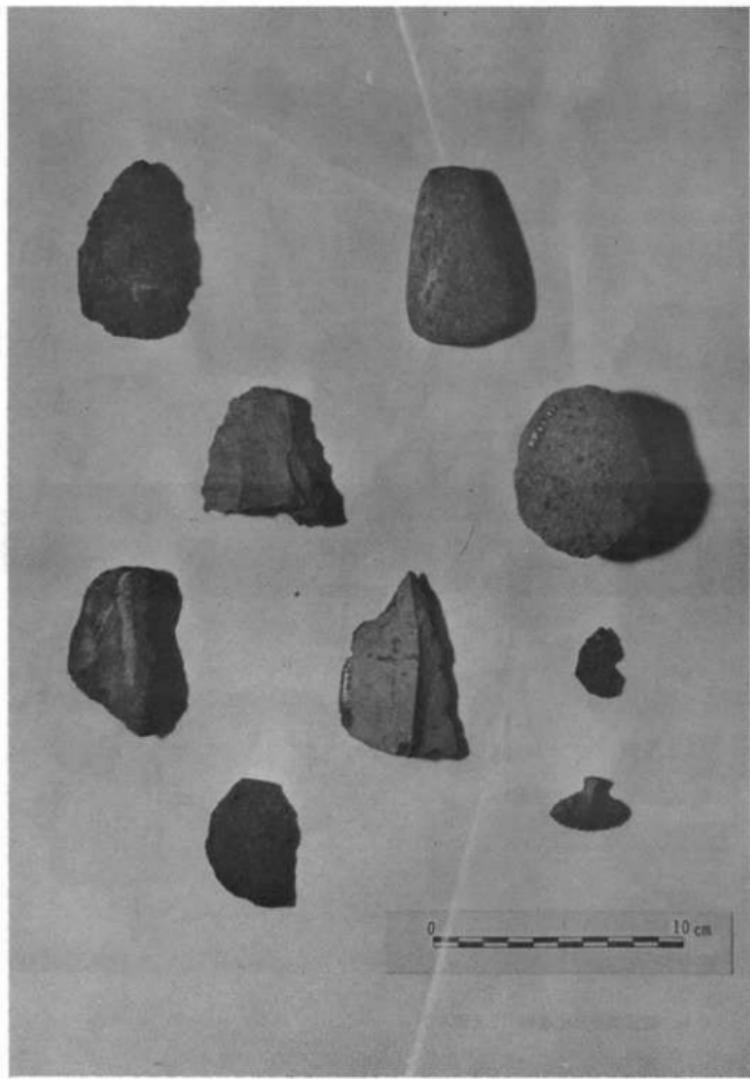


10. C-5 トレンチ 1号土塹(断面)



11. 確認調査出土遺物（土器片）

（図版） 確認調査出土遺物（土器片）



12. 予備調査出土遺物（石器）

館林市埋蔵文化財調査報告書 第1集

大袋、II 遺跡

(A 地点)

発掘調査報告

昭和56年3月31日発行

発行 館林市教育委員会

文化振興課 文化財保護係

館林市城町-3-1

印 刷 ナーラ印刷有限公司

